

読売争議のその後(1)

増山太助氏*に聞く

はじめに

- 1 第2次読売争議の終結
- 2 『民報』『アカハタ』への転身(以上、本号)
- 3 占領期の新聞事情

はじめに

増山太助氏からの聞き取りは3回にわたって行った。1回目は1989年10月23日、「読売争議の終結と『民報』」というテーマで法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館小会議室において、2回目と3回目は「日本民主主義文化連盟(文連)の結成と事業」というテーマで、1998年2月26日と3月、いずれも静岡県熱海市伊豆山の増山氏の自宅において行った。聞き取りは本研究所の庶務係の協力を得て、吉田健二があたった。本稿は、この3回にわたる証言を吉田の責任においてまとめ、これに増山氏が加筆・補正したものである。なお、1回目と2、3回目の証言はテーマが違うため、これの一つにまとめることはせず、それぞれ独立した形で発表することにしたい。2、3回目の証言は時期を改めて紹介する。

増山太助氏は1939(昭和14)年3月、京都帝大経済学部を卒業され、同年4月に読売新聞社が実施した最初の“公募採用組”として入社された。そして終戦後の1945年10月24日から始まった第1次読売争議では闘争委員、従業員組合の書記長として争議を勝利に導き、また翌46年6月12日からの第2次争議においても読売争議団の最高闘争委員として争議を指導された。この読売第2次争議は事実上、争議団側の敗北として終結したが、増山氏は、争議団代表として会社側との交渉にあたり、また争議中に新聞単一(日本新聞通信放送労働組合)の副委員長にも就任され、現在では占領期における新聞労働運動のほとんど唯一の証人となっている。

読売争議についてはすでに増山氏自身、「第一次読売争議史」や「第二次読売争議史(上・下)」(『労働運動史研究』第53号~55・56, 1970~73年)において詳細に紹介され、また『読売争議1945/46』(1976年)と題する著書もある。本稿は、この第2次読売争議が終結したのちにおける争議団幹部の転身、ないしは彼らの占領期におけるジャーナリストとしての足跡について紹介したものである。増山氏の今回の証言は、占領期の日本労働運動においてこれまであまり言及されてこなかったテーマであり、占領期の左翼ジャーナリズムの領域からも注目される。なお、増山太助氏

からの聞き取りは、本研究所が1991年6月に「戦後社会運動資料」の最初の復刻として出版した、占領期を代表する政論新聞『民報』（後継改題紙の『東京民報』を合わせて全8巻、法政大学出版局刊）の解題執筆にともなう調査の一環として行った。この『民報』については、同紙の主筆であった長島又男氏からも証言を得て、これを本誌の第396、399、403号（1991年11月、1992年2月、同6月）に発表した。また新聞単一の2代目の委員長を務めた川添隆行氏からも読売争議を含む新聞単一の運動について証言を得て、これを本誌の第464～465、第467～468号（1997年7～8月、同10～11月）に発表した。合わせてお読みいただきたい。

（吉田健二）

*【増山太助氏の略歴】 1913（大正2）年8月20日、東京・日本橋に生まれた。開成中学を1931（昭和6）年3月に卒業して、翌4月成城高等学校へ進む。2学年のとき自由主義教育の理念を掲げる小原国芳主事の解雇反対運動、いわゆる“成城騒動”を指導した。1935年3月に文化乙類を卒業した。1936年4月京都帝大の経済学部に進み、農業経済を専攻し、のち地代論を学んだ。在学中は、新村猛らの『世界文化』の発行に呼応して『学生評論』を創刊（1936年5月）するなど、反ファシズム人民戦線の運動に参加し、また1938年9月には春日庄次郎らの日本共産主義者団の事件に永島孝雄らと連座して検挙されたが、同年12月に釈放され、翌39年3月に卒業した。1939年4月、読売新聞社の“公募採用組”の第1号として入社し経済部記者となった。入社早々、1939年12月6日公布の小作料統制令の原案をスクープして一躍注目された。

1940（昭和15）年1月に召集された。千葉県市川市の野戦重砲連隊をへて、経理幹部候補生として臨時東京第三陸軍病院（神奈川県相模原市）の主計となり、1945年8月15日の終戦を任地で迎えた。1945年11月、第1次読売争議のさ中に結成された従業員組合の書記長に就任して争議を勝利に導いた。読売従組は1946年2月9日の新聞単一の結成にともなって読売支部となったが、同支部の常任執行委員、組織部長となり、また同年7月21日の新聞単一の第2回臨時全国大会で副執行委員長となった。この間、1945年9月の中旬ごろ吹田秀三、山主俊夫らと新聞・通信界では最初の日本共産党の読売細胞を結成し、第2次読売争議でも最高闘争委員として会社側との争議終結の交渉にあたった。

第2次読売争議が終結した1947年1月中旬、日本民主主義文化連盟の常任理事（組織・出版各局長）に就任し、出版部門では機関誌『文化革命』の編集委員や『働く婦人』の編集・発行人となった。また日本共産党の文化部員（部長・蔵原惟人）も兼ねた。1947年12月、日本共産党の全国オルグとして大阪に派遣され、関西地方委員会（書記長・志田重男）のもとで党活動を指導した。翌48年12月本部に戻り、選対部・選挙動員本部長に配属され、1949年1月の総選挙闘争を指導した。のち書記局事務に移り、婦人と青年・学生対策を担当し、50年6月における党分裂後は関東地方委員会委員に転籍し、朝鮮戦争下の東京都委員長となった。六全協後、本部細胞の責任者をへて、1958年7月の第7回大会後、日本共産党の専従を辞めたが、1979年5月に同党から除名された。

この間、1958年12月『健康会議』の編集長、1959年10月村上色彩技術研究所企画室長、1972年スター印刷企画代表取締役、1975年雑誌『一同』発行人代表、1977年から雑誌『新地平』代表取締役・主幹などを歴任した。現在は静岡県熱海市伊豆山のライフケア施設に居を移され、千葉県史研究会の助言者や労働運動研究所編集の『労働運動史研究』に「戦後運動史外伝・人物群像」を連載するなど、なお元気に講演、執筆活動をつづけておられる。著書に『読売争議1945/46年』（亜紀書房、1976年）、『産別会議の10月闘争 新聞放送ゼネストをめぐる』（五月社、1978年）、『検証・占領期の労働運動』（れんが書房、1993年）などがある。

1 第2次読売争議の終結

具島兼三郎氏について

今回は上京までして頂き、有り難うございました。大変お疲れのことと存じます。僕はこの夏、『民報』のかつての論説委員で、この間まで長崎大学の学長をされておられた具島兼三郎先生を福岡市南区のご自宅に訪ねてきました。『民報』の論説委員をなさっておられたときの編集局の様子をお聞きしたり、ご自身が執筆された社説や論説を特定してもらうためであります。具島先生とのお話の際も、増山さんが読売争議で大変活躍されたことが話題になりました。具島先生は、読売新聞社の論説委員時代のことや、読売争議の思い出などについても、とてもなつかしように話してくださいました。第2次読売争議からもう40数年経つんですね。

増山 ええ。具島さんは第2次読売争議の直前あたりに、招かれて『読売』の論説委員になったのです。具島さんはもとは満鉄調査部の方なんですよ。

私は、1945年8月15日の終戦から2週間とちょっと経って復社しました。そして9月に入って間もなく社内に“民主主義研究会”という、編集局の各部の次長クラスで社内の民主化を推し進めるグループが誕生しました。この“民主主義研究会”は政経部の連中が中心となっていて、論説委員の清水幾太郎、岩村三千夫、さらに私の上司であった坂野善郎さんなど、坂野さんは第1次読売争議ののち編集局次長・政経部長になられるのですけれども、具島さんもその“民主主義研究会”に入っていました。終戦まで執筆禁止の措置で、郷里に帰っていた鈴木東民さんも岩手から戻り、この“民主主義研究会”に参加したのです。第1次読売争議は、“民主

主義研究会”のメンバーがこぞって出した社内民主化など5項目の要求が拒否されたことが発端となって始まったのです。

具島さんは、清水幾太郎の後任として論説委員になられ、志賀重義、吹田秀三、長文連、片山睿さんらの論説委員と並び、第2次読売争議のときには私らの争議団に参加されました。具島さんは闘争委員会の委員として、また争議団の渉外部長になってもらい、もっぱらGHQとの折衝にあたってもらいました。彼は硬骨漢でした。語学力もあり、GHQとの接触は打って付けだったと思います。

これは今回、私が証言するテーマですが、読売争議が終結する過程で争議団の「自発的退社組」31名の次の就職先について、僕が窓口になって相談を受けたり、相手先との交渉を行った経緯がありました。しかし具島さんは僕が窓口になって民報社に入社されたのではないのです。具島さんはもと満鉄の調査部員で、中国研究者としても知られていた方です。とうぜん同盟通信社の上海支局長時代の松本重治さんとは面識があったわけで、民報社への入社はご自分で決められたのだと思います。『民報』に移られて1、2年して、こんどは九州大学の教授として福岡に移られたようです。

私は、具島さんのその後における活躍について承知しております。けれども『読売』時代から親しく付き合っていたわけではありませんし、先生とはこの間、ご無沙汰しております。この度の話にしても40数年も前のことです。考えて見ればずいぶん昔の出来事ですが、何か昨日のような感じがいたします。

私は読売争議について、労働運動史研究会が出した本（『産別会議』1970年、『占領下の労働運動』1991年、『占領下労働運動の分析』1973年、いずれも労働旬報社刊）にかなり詳しく紹介しました。東大社研の山本（潔）さんが『読

売争議(1945・46年)』(御茶の水書房,1978年)を出されるときや、鎌田慧さんが『反骨 鈴木東民の生涯』(講談社,1989年)を出すときも読売争議について何回かお話ししました。今回は、読売争議が終結したあとの話であり、私自身、占領期の左翼ジャーナリズム事情について話っておきたいと思っておりました。

よろしくお願いたします。

争議調停の交渉

増山 早速、本題に入ります。1946年6月12日、吉田内閣やGHQの新聞課が介入して鈴木東民さん以下6名の突然の解雇で始まった第2次読売争議は、1946年10月16日、会社側との交渉がまとまり約定書を取り交わして終結しました。この第2次読売争議は、直接には鈴木東民さんら6名の組合幹部に対する不当な首切りに反対する闘争として始まった争議で、127日にも及んでいます。約定書は、1、鈴木東民以下6名は依願退社の扱いで退社する、2、長文連以下31名は首切りを撤回し復社を認める、というものでした。

鈴木東民さんは争議が始まった当時、編集局長で主筆の職にあり、また読売従組の組合長も兼ねていました。長文連さんは指名解雇の6名には入っていませんが、当時は論説委員で、争議団の幹部の一人でした。

あなたからの申し入れでは、今回は、第2次読売争議が終わった後、争議団員のメンバーのうち誰がどういう経緯で民報社や日本共産党に移ったのか、主にはこの点について話をしてくれ、とのことであります。争議の内容や経過には踏み込まない、ということのようですけれども、話をすすめる前提として言及しないわけにはいかないのです。争議終結の経過について少し話しておきたいのですが...

どうぞ。

増山 約定書にも明記されていますけれども、鈴木東民さんら6名の首切りについては依願退社という形になり、何ら問題はなかったのです。退職金も規定通り出してもらおうということで話が着きました。争議費用についても会社側はこれを考慮し、項目別に検討して払うということになり、これについてもきちんと約定書に明記されました。

難航したのは、協定書の第2条に記された31名の問題なんです。すなわち会社側が争議の最中の7月15日付で“退社ヲ命ズ”として辞令を出した連中の扱いでした。私もその一人ですが、論説委員の長文連、吹田秀三、それに政経部次長の宮本太郎など31名が指名解雇され、この解雇については中労委においても不当労働行為と認定されていたのです。

具島兼三郎さんは解雇の辞令は受けていなかったそうですね。

増山 そうです。にもかかわらず具島さんは争議団に参加され、私らと一緒にたたかいました。具島さんについて私は先ほど硬骨漢と言いましたが、強い信念の持ち主で、ほんとうの民主主義者でした。

さて、争議の解決が難航したのは、この31名の問題をめぐって会社との間で話がつかなかったからなんです。私らは、31名の解雇撤回をもとめて中労委に提訴し、中労委の裁定も非常に微妙な票差でしたけれども、これを不当労働行為として認定したのです。労働委員会の会長の末弘巖太郎先生は、私の開成中学時代の先輩なんです。それで個人的にも相談に乗ってもらい、とにかく不当労働行為という判定となったのですけれども、占領軍の圧力があって31名の問題は暗礁に乗り上げた状態になっていました。そこで最終的に宇都宮徳馬さんに間に入ってもらい、どうか調印にこぎつけたのです。

宇都宮徳馬さんの親父さんは職業軍人だし

た。宇都宮さんは京都帝大の先輩で、学生時代は左翼運動でならし、新聞を賑わせて有名だったのです。その宇都宮さんの妹が、会社から首を切られた政経部長の坂野善郎さんの奥さんだったのです。坂野さんの奥さんは結核で亡くなりましたが、宇都宮さんは、坂野さんが奥さんを生前とても大事にされ、看病につくしてくれたことを知ってしまして、坂野さんに変感謝していたのです。また宇都宮さん自身、戦争中に仕事が無く、遊んでいたとき『読売』の経済欄のコラムを書かせてもらって、多少の収入を得ていた関係もあり、「じゃあ僕が間に入ろう」ということになって仲介してもらい、私が何回か宇都宮さんと会って話を詰め、ようやく調印にまで漕ぎ着けたのです。

6人組の問題についてはうまく事が運んだのです。繰り返しになりますが、鈴木東民さんはじめ6人は依願退社の形をとり、通常の退職金にプラスアルファの解決金の支給で了解を得ました。

しかし争議団のうち退社を命じられた31名の問題をどうするのか、会社側との交渉でも難儀しました。争議団の内部においてもあれこれの意見が出て、大変困りました。6人組の方は、自分らのために31名の犠牲者ができることは忍びないと言い、争議団のうち31名以外は復社することで会社側と合意していたのですけれども、彼らは、自分たちだけ帰って31名を見殺しにすることはできないというのです。結局、会社側が31名の解雇を撤回し、全員がいったんは復社したうえでそれぞれ自発的に退職の手続きをとるということでまとめ、その旨約定書にも明記されたのです。

渋川環樹の問題

増山 このことは、今回初めて話すのですが、私が31名の復社の問題で宇都宮さんを通じて先

方と交渉したさい、会社側が「渋川環樹だけは必ず返してくれ」と私に言うのです。渋川については無条件で復社を認めるから、とにかく彼を社に返してもらいたい、という強い申し入れがあったのです。渋川は当時、社会部の次長で、部長は編集局長の鈴木東民さんが兼ねていました。

渋川環樹さんは民報社へは取締役社会部長として入っています。渋川環樹さんのお父さんは明治期における『東京朝日新聞』の実力者で、社会部長を歴任され、論説選定委員（現在は論説委員）の主任をなさった渋川玄耳（げんじ）だそうですね。

増山 ええ、そうです。とにかく、渋川さんは生粋のジャーナリストなんですよ。彼は社会部畑で、同盟通信社の社会部の記者をへて読売新聞社に移り、それまでは文芸欄中心であった『読売』において、社会部欄を充実させた功労者の一人なんです。

渋川さんは東京帝大の経済学部を出ましたが、在学中は学生運動でならし、新人会の最後のころのメンバーでした。彼は滝川事件のときに東大でこれに反対する運動の中心的な活動家として活躍したのです。

われわれの争議団には東京帝大新人会のもとメンバーが何人かおりました。6人組のうち鈴木東民、片山睿（論説委員、編集局調査部長）がそうですし、争議団に加わった論説委員の吹田（旧姓信田）秀三も新人会のメンバーでした。『読売』の社長は警視庁の治安警察のボスであった正力松太郎ですけれども、記者連中には高等学校や大学で学生運動をやった経験者が多かったのです。

とにかく、渋川さんについては会社側は非常に高く評価していました。『読売』の場合は、社会部畑の人が編集局長になるというケースが多かったくらいに社会部が重視されていて、渋

川さんはその社会部でもホープの一人でした。会社側が、「渋川は戦後の読売新聞社を建て直すにはどうしても必要な人材なんだ。渋川だけは帰してくれ」と哀願していたのです。

反対に、渋川さんの方は「俺はみんなと一緒に辞める」といつてきかないのです。渋川さんは戦争中、シンガポールの支社長として赴任した経歴がありました。渋川さんは戦争が終わってから“俺は戦時中、戦犯的な役割を果たした”という意識を強く抱いていました。そういう自己批判というのか、かつての記者生活に対する強い反省があって、争議団に参加したという経過があったのです。

しかし、われわれ争議団は争議を一日も早く解決したいと思っていたし、できるだけ犠牲者を少なく、一人でも多くの争議団員を復社させるという方針を立てていました。それで私らは「会社もそう言っているのだから帰ってくれないか。そして、読売に戻って中心的な人間として活動してくれ」といつて説得を試みました。私らは、渋川さんを第2次読売争議後における組合側の立場での中心人物にしたい、と希望していました。そして彼もついに会社に戻ることを決意したのです。しかし渋川さんはいったんは復社したけれども、結局は1947年の2・1スト前後あたりに『読売』を辞めて民報社に移ったのです。このことについてはあとでまた述べます。

2 『民報』『アカハタ』への転身

民報社からの採用の申し入れ

増山 さて、民報社から争議団員のうち編集関係の記者を迎えたい、という申し入れがあったのは、私自身、争議終結へ向けて水面下で詰めた話し合いをしていたときでした。この申し

入れは最初、争議団の同じ最高闘争委員であった宮本太郎君にあり、そのあと私が窓口になってすすめたのです。

民報社のどなたから申し入れがあったのですか。

増山 栗林農夫(たみお)さんです。栗林さんは戦前に同盟通信社の社会部長を歴任され、プロレタリア俳人としても有名な方でした。俳号は栗林一石路といひます。宮本君がある日私に、民報社から争議団員の採用の件について話がしたいという申し入れがあったので争議団と組合を代表して至急、栗林さんに会ってほしい、との連絡を受けました。そして争議団の焼ビルだったと記憶しますが、私は2、3日して栗林さんと会ったのです。

栗林さんの申し入れの内容は「『民報』を何とか大きな新聞にしたい。つひは『読売』の編集局関係の人材がほしい。渋川環樹、宮本太郎、それに増山太助の3人はどうしても民報社に入社して頂きたい。渋川さんについては編集局長代理のような肩書で迎えたい」ということでした。

私は「結構な話です。けれども誰々と指名しての申し入れは困る。争議団員は現在、それぞれ読売を退社した後の身の振り方について考えており、この件は、争議団の指導部の責任でもあるのでみんなと相談して決めたい。人選はこちらに任せてもらいたい」と、その時は答えました。

栗林さんはそのさい私に「編集関係はできるだけ多数ほしい、全部来てくれてもいい」とまで言われたような記憶が残っています。私はこの申し入れに感謝しながらも、とにかくこの問題は個別に紹介するのではなく、争議団の全員に諮ったうえで事を決めようと思ひました。

栗林さんとの話し合いから何日かして、民報社からわれわれにもう一回会いたいという連絡

がありました。それで、現在は徳間書店を営んでいる徳間康快（みちやす）君と私の二人が民報社に出かけまして、社長の松本重治さんと長島又男、栗林農夫さんの3人と面談したのです。松本さんから直接、「『民報』を大きくしたいが何せ編集陣が弱い。『読売』の編集局のスタッフを迎えてこれを強化したいので、ぜひ協力を願いたい」と正式に要請されたのです。私は「民報社の事情もわかりました。早速、『民報』に入社したい希望者を募ることにします」と答えて、その日は帰ったのです。

民報社へ行かれたのはいつのことですか。

増山 1946年10月、10月といっても何日も経っていないと思います。約定書の調印が10月16日の午後6時です。だから調印の10日ぐらい前、いや1週間ぐらい前だったかもしれない。そして民報社からの正式な採用申し入れを全員に伝えましたところ、入社を希望したのが吹田秀三、宮本太郎、国松藤一、私、それに女性記者の吉田玉の緒、徳間康快らの顔触れだったのです。

『読売』の社会部は当時、何といっても渋川さんが中心なんです。実力がありましたから。社会部では渋川さんと行動を共にしたい、という人がほとんどでした。女性記者の吉田玉の緒さんなんかは渋川さんを一番尊敬していて、吉田さんが民報社へ移ってから、渋川さんと一緒に仕事をしたいと口癖のように言っていたのです。

渋川さん自身、栗林農夫さんから話があったときは『民報』へ移る気持ちでいたようです。けれども、その時点では「渋川だけは本社に戻してくれ」と会社側から求められており、交渉が継続中でした。もし、会社側との交渉で渋川さんの問題が浮上しておらず、希望を募った時点で彼が『民報』へ行くことが決まっていたな

らば、社会部の連中がごっそり移ったことは確実なんです。

本多房子さんという女性記者が当時、読売支部におりましたか。『民報』の女性記者で、のち『婦人民主新聞』の方に移られた方ですが。

増山 記憶にはないですね。当時、女性の記者は『読売』では吉田玉の緒、谷口翠（みどり）君など3人ぐらいでしたよ。女性記者は非常に少なかったのです。これは『読売』だけでなく、どの新聞社においてもそうでした。

話を戻します。このことは後で述べますが、政経部長の坂野善郎さんは最初から『アカハタ』へ行くことを希望し、そのように決まりました。坂野さんは私の京都帝大の先輩です。私の上司でもあり、どちらかといえば私は坂野さんに近い存在で、実際に周囲からもそのように見られていました。だから、私は本来ならば坂野さんと一緒に『アカハタ』へ行くのが当然であったのかもしれない。

けれども私は新聞単一の副執行委員長をやっていましたし、私自身、新聞記者をしながら組合運動をつづけようと思っていました。吹田秀三さんも同じ考えだったのです。『民報』の労働組合は規模としては小さいけれども、いつも読売支部と共同してたたかっていた組合で、私は『民報』を基盤に組合活動をつづけようと思って、迷うことなく民報社への転身を選んだのです。

具島兼三郎さんは1947年2月ごろ、論説委員として民報社へ入社されています。具島さんの入社について、増山さんは一切タッチされていないのですね。

増山 ええ、そうです。具島さんが民報社へ移られたことを知ったのは、私が文連へ移籍してしばらく経ってからなんです。私自身、“ええっ”と驚いた記憶があります。だって具島さ

んは争議団に参加しましたけれども、第2次読売争議では処分されておらず、社に戻る口だったのです。だから、具島さんの民報社への入社はまったく自発的に決められたのだと思います。

日本共産党からの申し入れ

増山 さて、『民報』への移籍問題が一件落着し、ほぼ会社側との調印・争議終結という見通しも立って私らがほっとしていましたら、記憶では調印の数日前のことですが、当時、日本共産党の人事を担当していた竹中恒三郎さんがひょっこり争議団の事務所にやって来ました。竹中さんは、1937年12月5日の春日庄次郎らの日本共産主義者団の事件で検挙され、ずうっと獄中であって、敗戦によりGHQの政治犯に対する釈放令で出て来た組なんです。彼は共産党の第5回大会(1946年2月24日)で、中央委員候補に選ばれていました。

竹中恒三郎さんの用件も、争議団の解雇組の採用についてであったのです。竹中さんは率直に『アカハタ』の編集は事実上、新聞製作においては経験のない素人がやっていて、非常に弱体である。もし争議団員で共産党に来たいという党員がいれば、本部勤務員として、あるいは『アカハタ』などでできるだけ引き受けたい。協力してくれないか」という申し入れでした。

私はいま、竹中さんが争議団の事務所に来たのが調印の数日前といいましたけれども、もしかしたら2、3日前だったかもしれない。とにかく争議終結の直前のことでした。さらに、竹中さんはそのとき「編集局の人達だけでなく、あかつき印刷も弱体なんで、工場(工務局)関係の人達も希望者があれば全員迎えたい」という話でした。

とにかく突然の申し入れでした。実際、当時の『アカハタ』(1946年1月8日付第10号より

『赤旗』=セッキを改題)は何もかも弱体だったのです。発行も最初は不定期刊とか5日刊で、のち週3日刊となりましたけれども、当時はまだ日刊になっていませんでした。

『アカハタ』の主筆は志賀義雄氏で、編集局長は松本一三さんです。志賀さんは理論家であり、かつ物書きは得意ではあっても、新聞とは無縁の人です。松本さんも同じです。松本さんは戦後すぐ、『赤旗』(セッキ)の再刊を中心となって準備した一人です。松本さんは古い党員であり、戦前の一時期に日本プロレタリア作家同盟に入っていたけれども、新聞製作の経験はゼロなんです。確かに、戦後すぐのころの『アカハタ』の紙面は堅苦しく、一見していかにも素人がつくっているという感じではありました。当時、『アカハタ』に新聞製作のプロがいなかったのです。

この日本共産党からの正式の申し入れがあって、争議団では、『アカハタ』とあかつき印刷へ行きたい希望者を正式に募りました。そして編集局関係では6名のうち坂野善郎、山主俊夫、志賀重義、片山豊の4人が日本共産党の本部に移籍することになりました。彼らはまず、党の教育宣伝部の部員として入り、『アカハタ』の編集も手伝うということになったのです。そして、坂野さんは編集局長格で迎えられ、山主さんは整理部長になったのです。

『読売新聞』の神経中枢がいわばごっそり『アカハタ』に移った、という形になったのですね。

増山 ええ、そういうことだと思います。彼らは新聞製作のプロ中のプロです。さらに編集局関係からは樋口見治、庄司源雄、谷口翠、窪寺福寿も『アカハタ』へ行くことになりました。樋口君は整理部の次長で、山主さんのすぐ下にいた人です。庄司君は坂野さんと非常に親しかったので、行動を共にしたのだと思います。谷

口翠さんは自らの意志で決めたのです。彼女のご主人は戦時中、なかなかの活動家だったのですけれども戦死して、彼女は未亡人になっていました。有能な女性記者でしたよ。窪寺君は資料部員だった人です。

日本共産党の本部へはもう一人、私と同じ政経部員であった国松藤一君が、『民報』へ行くのを止めて党の方へ移ることになりました。たぶん出版部の方へ回ったのだと思いますが、党の方で新しく『大衆クラブ』という、それまでの『労働者』を改題して大衆向けの月刊雑誌を出すという企画が検討されていて、彼はその雑誌の編集を担当するというで迎えられたのです。

綿引邦農夫の入社を拒否される

争議団員のうち工務局関係の人達は、希望者は全員、あかつき印刷へ移られたのですか。

増山 いや、残念ながら選別されて、全員は移られなかったのです。希望調査の結果、工場関係の人は文選工の田辺武夫君を除いて全員、あかつき印刷に行くことを希望しました。田辺君も希望していたけれども、共産党の本部のほうに移り、宮本（太郎）君らと全国オルグになりました。

あかつき印刷の方で入社を断ったのは、綿引邦農夫（くにのぶ）さんなんです。綿引さんは文選工で、あなたもご存じだと思うけれども大杉栄さんの時代から活躍された有名なアナーキストで、信友会のメンバーとして多くの印刷・出版関係の争議に関係された方なんです。戦前の東京印刷工組合の争議や、全国労働組合自由連合会、さらに戦後のアナーキズム運動でも活躍された方なんです。方々の新聞社の印刷工場をわたり歩いて、昭和になって読売新聞社に移って来られたのです。

先方が、綿引邦農夫の入社だけは困ると言ってきたのです。私らは「それはおかしいじゃないか。あかつき印刷は民間の株式会社であり、共産党本部に入るのとはわけがちがう。これは明らかに差別であり、認められない」と抗議したのですけれども、やはり駄目でした。

当時、日本アナーキスト連盟は読売争議を支持していました。機関紙の『平民新聞』でも“読売争議は誇るべき争議”として紹介し、共産党とも一緒になって統一戦線の結成をめざしてたたかおう、と訴えていたのです。私らの抗議に徳球（徳田球一）さんは「入社しても構わないではないか」と現場を説得したのですけれども、結局は駄目だったのです。そういう経緯がありまして、綿引さんはあかつき印刷に行けなかったのです。

文連への転籍

増山 綿引邦農夫さんの件で私があかつき印刷の人と折衝しているとき、争議終結の直前、たぶん1、2日前だったと思いますが、竹中恒三郎さんと入れ違いの形で、共産党本部の西沢隆二（ペンネームはぬやま・ひろし）が別の人事をもって争議団の事務所にやって来ました。その人事とは、争議団のうち私と宮本太郎と田辺武夫の3人は「共産党の全国オルグとしての任務についてくれ」ということでした。西沢は、私に対し「これは徳球さんの直接の指示である」と言ったのです。実際に徳球さんの指示であったかどうかは知らないけれども、まったく命令的な口調でした。

それも、突然の申し入れなんです。第2次読売争議は、産別会議の10月闘争のさ中に終結するのですけれども、つづいて1947年の2・1ストが予定されていました。西沢隆二によると、その2・1ストを前に九州地方の闘争態勢が立ち遅れているので九州へ行ってくれないか、と

いうことでした。

西沢のはちに徳球さんの娘婿になった人です。この西沢の言葉を党の命令と受け取るのは、しごく自然のことです。私は全国オルグとして、九州へ行かなければならないという気持ちになりました。そして話し合いの結果、私と宮本太郎と田辺武夫ともう一人、山根修という社会部員の4人が、九州地区担当のオルグとして派遣されることが正式に決まったのです。

ところが、話は実にやっこしいのです。争議が終わって私が事務所で残務整理をしていたとき、突然西沢隆二がまたやって来て、私に「事情が変わった。君の九州行きは取り消したい。すまないが日本民主主義文化連盟（文連）に行ってくれ」と言うのです。これも命令的な口調です。

何だかんだと共産党のつごうでしょっちゅう変わって、私は完全に振り回された感じでした。こういう経過で私は全国オルグとして九州へ赴任する件は撤回され、私は共産党の文化部員として、また文連の常任理事として新しい持ち場に着きました。1947年の2・1ストの直前のことです。

したがって争議が終わってすぐ『民報』へ行ったのは吹田秀三、吉田玉の緒、徳間康快の3人だったと思います。共産党の全国オルグとして九州へ行ったのは結局、宮本太郎、田辺武夫、山根修の3人になりました。

他の争議団員の転身

増山 ここで、参考までに他の争議団員の身の振り方について紹介しておきたいのですが。

ぜひお願いします。

増山 まず、鈴木東民さんは故郷の岩手県の釜石に帰りました。東民さんは東京帝大を出て『大阪朝日新聞』に勤め、のち電通（日本電報通信社）に移り、ベルリン特派員としてドイツ

に赴任しました。しかし彼はナチスを猛烈に批判する記事を書いて国外追放となり、日本に帰国して『読売』の外報部長となったのですけれども、なお軍国主義批判の言論活動をつづけ、横浜事件（1944年1月）にも連座しています。そして起訴猶予となったものの、社内では執筆を止められ、終戦まで釜石に帰っていたのです。争議終結後は釜石市長に当選して“革新市長”として話題になり、釜石市議にもなりました。

6人組のうちもう一人の岩村三千夫さんは、争議中から自分は研究生活に戻りたいと言っておりまして。岩村さんは在職中、論説委員で、もとは東亜部に所属し香港支局長の経歴もあり、アジア問題や中国事情に精通していました。彼は争議が終わってすぐ中国研究所に移ったはずですが。

さらに僕と同じ政経部員の大沼直志君、彼は仙台市近くの鳴子温泉の旅館の息子さんなのですが、『読売』での経験を地元の新聞で生かしたいということで『仙北新聞』を創刊しました。社会部のベテラン記者であった小俣行夫君は『埼玉新聞』に移り、のち編集局長になりました。また、論説委員の笠原輝次さんと『月刊労働』編集部の次長の能智修弥さんの二人は文筆活動で生活したい、ということで就職を求めませんでした。

このほか宍戸賢二君、この人は鉛版課長でしたが、彼と印刷工の菅田信一君の二人は国に帰るということでした。二人とも田舎に帰った後、共産党の地方議員になったという知らせを受けました。これ以外の工場関係の人はさっきお話しした綿引邦農夫さんと鉛版工の奥田吉男を除き、小林豊一君以下14名があかつき印刷に再就職したのです。

長文連さんはどうなさいましたか。

増山 長文連さんは居住地の世田谷区に帰って、消費組合運動を始めました。いまでいう市

民運動家になりました。

ここで総務部所属の奥田吉男について少し述べておきます。この男は実は初めから会社側のスパイとして争議団に潜り込んで来た人なんです。奥田は表面上、活発に活動していました。しかし争議中に彼が会社側に通じていることが判明し、私も彼を捕まえてその経緯を聞こうと思った途端、争議団から姿を消したのです。会社側は、ごていねいにもこの奥田をいったん解雇し、あとでこっそり会社に戻したのです。私も解雇された争議団の人数は31名となっていますが、この人数は奥田も含んでのものです。調印の際、仲間から奥田を入れる必要はないという意見が出ましたけれども、一応、人数の中に入れております。

渋川環樹の『民報』入社

増山 このような経過で、全員の身の振り方が決まったわけです。

さて、質問の渋川環樹さんの『民報』への入社の件ですが、彼は約束通り争議が終わって『読売』に戻りました。また解雇されなかった他の争議団も復社したのですが、会社側は、彼らを編集局付にしたまま実際に仕事をさせないで放って置き、まあ嫌がらせをしたのです。求められて帰社した渋川さんも、当初は責任ある仕事を与えられなかったようなんです。職場の雰囲気もがらっと変わっていた。渋川さんの性格も影響していると思いますが、彼は根っからの新聞記者でしたから、新聞製作をしないで新聞社にいるなんて、彼には非常に苦悩だったのではないのでしょうか。そこに民報社からの再度のアプローチがあり、また吉田玉の緒さんの再三の誘いなどもあって、民報社に第2次の入社組として、具島兼三郎さんたちと移ったのだと思います。

渋川さんが『読売』を辞めたいという話は、

1946年の年明けの1月半ばごろと記憶していますが、宮本（太郎）君から聞きました。彼は、会社側の要望で「渋川だけはどうしても戻してくれ」ということだったのに、実際は冷や飯を食わされたのです。

実は渋川さんは復社してすぐ、彼が中心となって、いったん潰された読売新聞社の日本共産党の組織を再建した経過がありました。私なんかから見ても、渋川さんはかなりの組織活動家だと思うのです。私は、『読売』の党のことも気になっていましたから、宮本君から話を聞いて心配になり、「もうしばらく頑張ってくれ。これは私らと争議団全員の意志だ」ということを伝えたのです。しかしやっぱり、渋川さんは新聞人なんです。復社しても冷や飯を食わされ、社内ががらりと変わった雰囲気の中で、彼自身が悩み、耐えられなかったのではないのでしょうか。

この間の調査で、民報社が渋川環樹氏や具島兼三郎氏の入社にとっても熱心であったことがわかりました。これはどのような理由からでしょうか。

増山 具島さんは先ほども述べましたようにもと満鉄の調査部員で、中国問題について精通していました。第2次世界大戦後の世界政治の焦点の一つはアジアで、何といても中国問題です。そして民報社には満鉄調査部で一緒であった中西功さんが論説委員として勤めており、また社長の松本重治さんとの関係もあり、請われたのではないのでしょうか。『民報』は、中国共産党の報道や中国問題の分析で定評があったのです。

渋川さんについては、また別の意味合いがあったと思います。それは『民報』の社会部の拡充です。『民報』は政治関係は強いけれども、『アカハタ』と同様、社会部は弱かったのです。また、これは私の勝手な解釈なんですけど、『読

売』は第2次争議が始まってから、GHQの圧力で完全に右旋回してしまいました。それまでは“民主読売”であったのです。その『読売』が右旋回した結果、『民報』の存在が浮上し、また民主陣営に期待されていました。この機会に渋川さんを迎えて新聞社として飛躍しよう、と考えたのじゃないでしょうか。

なるほど。

増山 “民主読売”の進歩的な要素というか、そうした役割を『民報』が担おうとしたことは十分考えられます。1946年の年末から47年の年明けにかけて、日本の労働運動は2・1ストへ向けて急速に盛り上がりました。『読売』が右旋回した中で、『民報』がこれをチャンスと見てこれに代わって世論をリードして行こう、これを機に『民報』を拡充・拡大していこう、と考えたのは確かですよ。そのためには渋川さんがどうしても必要な存在だったのです。

『民報』は論説を売り物にしていました。当時としてはめずらしい政治新聞です。しかし現代の新聞は、あるいは新聞社が大きくなるためには、例えば『読売』が大正時代や昭和の初めに文芸欄や娯楽・生活面で部数を伸ばしたように、大衆性や生活性がなければならないのです。少なくとも社会部とか経済部のような部門が充実していないと、新しい時代や国民の期待には応えられないでしょう。

結局、『民報』が、新聞製作で一番拡充し、かつ人材として欲しかったのは社会部と政経部の記者だったのでしょう。『民報』の場合、政治部と経済部が分かれていたようですけども、現代における大衆向けのスタンスで重要な部門はこの社会部と経済部だったのです。だから栗林農夫さんが社会部の渋川環樹さんや、論説委員の吹田秀三、政経部次長の宮本太郎にこだわったのはしごく当然のことなんです。

渋川さんは亡くなったそうですね。

増山 そうです。渋川さんは風呂の中で急死したのです。たぶん酒を飲んで、風呂に入ったのではないのでしょうか。ご家族とは連絡がとれますよ。

宮本太郎について

増山 栗林農夫さんは宮本(太郎)君を高く評価していました。宮本君は水戸高校時代に共青(共産主義青年同盟)の運動に関係して中退したという経歴がありました。もともと左翼なんです。彼は私より数年早く読売新聞社に入り、社会部の記者として出発しました。栗林さんも戦前に同盟通信社の社会部長をされ、当時の新聞・通信界でも著名な存在でした。栗林さんは渋川さんや宮本君を昔から知っていました。宮本君は結局、徳球さんの命令で共産党の全国オルグとなり、『民報』には移らなかったけれども、栗林さんご自身、渋川さんや宮本君がどれくらいの能力の持ち主かあらかじめ知っていて、その上での入社交渉であったと思います。

『読売』は戦時中、大きく部数を伸ばしました。そして『読売』だけでなく、どの新聞社においても軍国主義を賛美し、それを支える役割を果たしたと思います。宮本君は戦時中、有能であっただけに『読売』で一番、戦争記事を書いた記者だといわれていました。戦争が終わって間もなく、社会部の中で“宮本が左翼になるなんて、そんなバカな話があるか”と問題になり、社会部は彼を受け入れなかったのです。しかし彼は有能ですし、それまでの経験・実績がありましたものですから、政経部の方でひろろということになり、会社もまた彼を政経部の次長という地位にすえたのです。

(つづく)